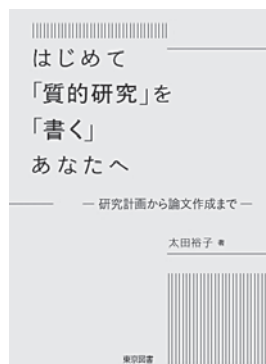


書 評



太田裕子著

はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ
研究計画から論文作成まで

東京図書、2019年発行、230p.

ISBN : 978-4-489-02320-0

本間 祥子

1. はじめに

本書は、初めて質的研究法を用いた研究を行い、論文を作成しようとする読者に向けて書かれたものである。そのような読者が、質的研究法を用いた研究を計画・実施し、その結果をふまえた研究論文を作成できるようになることが、本書の目的とされている。また、本書は、著者が、早稲田大学における大学院生を対象に行った授業「質的研究方法入門」および「質的研究法」での取り組みをもとに書かれている。評者は、かつて上記の授業の受講生であり、本書に書かれている一連の研究プロセスを経験している。そのような立場から、本書の内容を概観したうえで、その意義と課題について述べる。

2. 本書の特徴と概要

2.1 本書の特徴

本書には、「質的研究」と「書く」という二つの重点がある。両者は、互いに切り離すことができず、「質的研究」のプロセス全体にわたって、「書く」ことは非常に重要な営みであることが強調されている。たとえば、インタビューや観察の結果をデータとする場合、調査を進めるにあたって書くことが重要な役割を果たしたり、研究論文を執筆する際には、書くことによって思考が明確になったりする。このような考え方のもと、本書では、「質的研究」と「書く」ことに関する活動が各章に設置されている。各章の前半部分では、「質的研究」に関する理解を深めるための内容を、そして、後半部分では、「論文作成ワーク」という課題に取り組むことによって、「書く」活動を行うことができるようになっている。

また、本書は、一人で自学自習する場合でも、大学の授業等で他者と一緒に学ぶ場合でも使用できるように工夫されている。本書の「評価シート」を使いながら、自らの学びを振り返ることができるため、一人で学ぶ場合であっても、どのような点を意識して学べばよいのかが分かりやすい。ただし、書く活動に取り組む際には、他者からコメントをもらうことによって、よりよい文章を書くことができるようになるため、自学自習する場合

あっても、友人やライティング・センターなどの文章作成支援機関を使い、やり取りをすることが推奨されている。

2.2 各章の概要

本書は、全11章で構成されている。第1章から順に読み進め、各章の論文作成ワークに取り組むことで、質的研究の計画と実施、論文作成を進めることができるようになっている。読者は、各章において、質的研究法を用いた研究を実施するとはどのようなことかを学びながら、実際に自分の設定した研究課題に取り組み、最終的には一本の研究論文を書き上げることができる。各章の概要は、以下のとおりである。

まず、第1章では、研究、論文、質的研究とはどのようなものなのかを概観したうえで、一般的な論文の構成について学ぶ。これから質的研究を行おうとする読者は、なぜ自分が質的研究を選ぶのかを改めて考えながら、自身の関心、問い、立場を自覚したうえで研究方法を選定していくことになる。

第2章では、研究者の立場について検討する。ここでは、研究における代表的な哲学的、理論的立場を概観したうえで、自分の立場を明確にすることの重要性について学ぶ。本書では、特に Crotty (1998) の考え方を引用し、研究においては、「認識論」「理論的パースペクティブ」「方法論」「研究手法」の四つの要素が一貫していることが重要であると述べられている。

第3章では、研究における「問い」の重要性を理解したうえで、よい「問い」を立てるための活動を行う。著者によれば、「研究は、自分で立てた「問い」に、自分で「答え」を見つかる営みである」(p.48)。「問い」があるからこそ、それに答えるために調査を行うのであり、「問い」に答えるために、最もふさわしい研究方法を採用する。それゆえ、「問い」の立て方によって、研究のあり方そのものや、導かれる答えさえも左右されるのである。さらに、ここまで学んだことをふまえ、論文作成ワークでは、序章の第一稿を書く活動が設定されている。

第4章では、なぜ先行研究をレビューするのかを考え、実際の論文のなかでどのように先行研究をレビューすべきなのかを検討する¹。ここでは、先行研究を読む目的が五つにまとめられている。それらをふまえ、適切な先行研究をレビューしたうえで、研究における理論的枠組みを構築することの重要性が強調されている。そのうえで、論文作成ワークでは、自身の先行研究章を書く活動が設定されている。

第5章、第6章では、質的研究において代表的なデータ収集の手法である、インタビューと観察を取り上げ、その基本的な特徴や種類、手続きについて学ぶ。第5章では、実際にインタビューを行い、インタビューの報告書を作成する。また、第6章では、何をどのように観察し、観察した内容をどのように書くのかを検討する。そのうえで、身近なフィールドでの観察を行い、フィールドノートを書く活動が設定されている。読者は、これらの体験を通じて、自分の研究に合った研究方法を考えていくことになる。

そして、第7章では、自分が興味をもった研究方法論を調べ、その特徴や強みと弱みを理解したうえで、自分の問いに答えるための研究方法を決め、記述する活動を行う。ここでは、研究方法論・研究手法に関する解説書や入門書が「ナラティブ、ライフストーリー」、

「エスノグラフィー、フィールドワーク、エピソード記述」といった項目ごとに紹介されている。読者はそれらを参考にして、自分の研究に合った方法を選ぶことができる。その際、自分の設定した研究の問いに立ち返り、その問いを、より具体化した小問いに細分化することによって、自分が何を明らかにしたいのか、そのためにどの研究手法を用いるのか、その手法によって本当に問いに答えることができるのかを厳しく検討することが求められる。

第8章では、研究倫理、調査協力の依頼の仕方、調査協力者との関係について検討する。人と人が関係を築くなかで行われる質的研究では、どのような問題が生じる可能性があるのか、そして、どのような点に留意するべきなのかを学ぶことが必要である。論文作成ワークでは、研究対象となる人々への「研究協力依頼書」、「研究倫理遵守に関する誓約書」、「研究協力同意書」を作成する活動を行う。その際、著者が過去に作成した文書の例が掲載されており、参考にすることができる。

第9章では、質的研究において行われることの多い、二つのデータ分析の考え方と手順が説明されている。まず一つは、グラウンデッド・セオリーに依拠した、コーディング、カテゴリー構築、理論生成という一連の分析であり、もう一つは、ナラティブ分析である。いずれの手法を用いる場合であっても、データの意味を理解することの重要性が強調されている。データを繰り返し何度も読み込み、データと対話しながら、その意味を理解していくことが重要なのである。後半の論文作成ワークでは、自分の行った調査を振り返って研究の問いを練り直す活動と、インタビュー・データのサンプルを使って、実際にデータ分析を体験する活動が設定されている。

第10章では、質的なデータとその分析結果をどのように記述するかを検討する。自分の研究の問いに対する答えを示すためには、何を、どのように記述すればよいのか。ここでは、論文の研究結果章、考察章、結論章には何を書くべきなのかを学びながら、自分の研究には、どのような記述のスタイルが適切なのかを模索することが求められる。また、論文作成ワークでは、実際に調査結果と考察、結論の章を記述し、それをクラスメイトや仲間と検討し合う活動を行う。

最後に、第11章では、質的研究、および論文の質を高めるための観点を理解したうえで、論文全体を推敲し、自他の論文を評価する。特に、質的研究において、「信頼性」と「妥当性」をどのように捉え、どのように担保するのかを考えることは、重要な課題である。これらについては多様な取り組みがあるが、質的研究の「質」を高めるためには、データ収集、分析、理論化、記述のプロセスを省察し、透明化することが共通して重要であることが指摘されている。

以上が、各章の概要である。

3. 本書の意義と課題

3.1 本書の意義

以上をふまえ、本書の意義について述べる。

冒頭で述べたように、本書は、初めて研究を行う人や、初めて質的研究に取り組む人の

ために書かれたものである。本書では、質的研究法を用いた研究を遂行するにあたって、何を考えなければならないのか、それはなぜなのか、また、研究論文とはどのように書き進めるものなのか、といったことが分かりやすく説明されている。そのため、上記のような読者は、今自分が何をすべき段階にあり、次にすべきことは何かという見通しをもって研究を遂行することができる。

このような研究活動の一連の流れというのは、これまで自ら学ぶものとされていることが多かったのではないだろうか。もちろん、自身の関心に関連する先行研究や論文執筆に関する書籍等を読み込み、自ら学ぶことは非常に重要である。しかしながら、修士課程の二年間など、限られた時間のなかで、今自分が研究活動において、どのような段階にあるのかが理解できないまま、なんとなく研究を進めている人も少なからずいるのではないかと考えられる。そのような読者にとって、本書は、一度立ち止まって、自分が行ってきたことを振り返り、何ができていて、何ができていないのかという自覚を促す役割を果たす。その際、本書の重点とされている「書く」活動を行うことによって、思考が整理されたり、研究の軌道修正がされたりすることで、よりよい研究論文が出来上がっていくと考えられる。

特に、第2章で扱われている「研究における立場の明確化」と、第4章で扱われている「先行研究レビュー」は、初めて研究を行う人にとっても、既に研究を行った経験のある人にとっても、どう記述すべきかに迷うことの多い部分ではないだろうか。著者が述べるように、一つひとつの方法論の背景には、それぞれに哲学的、理論的立場があり、それらが発展してきた歴史がある。ゆえに、先行研究をレビューし、自分の理論的枠組みを示すということは、その背後にある認識論や理論的パースペクティブをも示すことになるのである。自分自身の研究が行き詰まっていると感じる場合、これらの点に関する思考が曖昧であったり、一貫性が欠如したりしていることが考えられるだろう。本書では、この点に関する代表的な知見が整理されたうえで、どのような順序で考えていけばよいのかが明示されている。そのため、読者は、単に質的研究に関する手法を学ぶだけでなく、その背景にある考え方をしっかりと理解したうえで、自らの研究を進めていくことができる。これらの点が整理され、明確に記述されるようになるだけでも、より質の高い研究論文を執筆することができるようになるだろう。

以上の点に、本書の意義がある。

3.2 本書の課題

最後に、本書の課題を述べる。本書において繰り返し述べられていることは、自分自身の研究関心や立場を自覚し、それに合った研究方法や分析の方法を選び取ることである。そして、その点を読者に分かりやすく、詳しく説明することが重要とされている。さらにいえば、確立された既存の研究手法を用いるだけでなく、自分の研究目的に合う研究手法を自ら作り出していくことも可能であると述べられている。それでは、読者は、どのように自分に合った研究方法を判断することができるのだろうか。そして、自分の研究目的に最も適した研究方法やデータの示し方を作り出すとは、一体どのようなことなのだろうか。

評者自身が博士論文を執筆したときのことを振り返ってみると、最も頭を悩ませたのが、この研究手法やデータの示し方に関することであった。自分が見たいこと、伝えたいこと、

それをどのようなプロセスで記述していくべきなのか。それらを提示するために、既存の手法には援用できそうなものもあるが、ぴったりと合致するものが見当たらない。では、自身が最良と考えるデータの示し方は、果たして、十分な研究と認められるのだろうか。読者に対する説明は何をどこまで書けば十分といえるのだろうか。このようなことを試行錯誤し、よりよい記述の仕方を模索しながらの執筆は、時に苦しい作業でもあった。また、自分自身が最良と判断した記述のスタイルであっても、読み手に対して、思うようにその意図が伝わらないと感ずることもあった。

本書の読者のなかにも、研究を進めていくなかで、上記のような悩みを抱える人は少なからずいるのではないだろうか。このような悩みを抱えたとき、どのように乗り越えていくべきなのか。読み手に対して、自身の意図が伝わらない背後にはどのような問題があるのか。そのような悩みの内実を共有し、自分の研究目的に合った研究方法を作り出ししていくということについて、そのプロセスを詳しく検討していくことが、今後の課題になると考えられる。

4. おわりに

以上、本書の内容を概観し、その意義と課題について述べた。評者は、修士課程に入学した半年後に、著者が開講する「質的研究方法入門」の授業を受講する機会を得た。研究とは何か、質的研究とはどのようなものか、論文作成とはどのようなプロセスなのかを学んだことによって、自分自身の修士論文の方向性が、徐々に定まっていっていったと感ずている。そして、この授業のなかで、評者が初めて研究論文のかたちに取り上げた原稿は、修士論文の一部となっている。また、クラスメイトと一緒に考えながら初めての研究活動を進めることができた点も、非常に有意義であったと記憶している。著者が述べるように、質的研究を書くことは、「楽しく、わくわくする営み」である。本書をとおして学び、体験したことを通じて、読者は、自分の関心を探究することの楽しさを実感し、今後自分の目的に合った研究を遂行していくための一歩を踏み出すことができるのではないだろうか。

注

- 1 ここという「先行研究」とは、「過去に行われた研究の成果のうち、文書化され公開された文献全体を指すこと」(p.67)とされている。

参考文献

Crotty, M. (1998). *The foundations of social research: Meaning and Perspective in the research process*. Crows Nest: Allen & Unwin.

(ほんま しょうこ 日本大学国際関係学部)